

同志社と看護学教育

～学士課程でいかに看護専門職を育成するのか～

Doshisha and Nursing Education
-Focusing on education of Nursing Personnel in Baccalaureate Degree programs-

岡山寧子¹⁾, 眞鍋えみ子¹⁾

Yasuko Okayama, Emiko Manabe

I. はじめに

2015（平成 27）年 4 月、同志社女子大学において 6 番目の新しい学部として看護学部（以下、看護学部）が開設された。そもそもこの新学部設立の実際的な動きは、2012（平成 24）年 12 月以降、文部科学省との折衝、設置計画の策定・実施（教育課程、人事、設備・施設、実習施設、規定等）を経て 2013（平成 25）年 5 月教授会、法人理事会において看護学部の設置が承認された。その後、2014（平成 26）年 5 月末から 6 月末にかけて、設置許可申請書を文部科学省へ、看護師学校等指定申請書を京都府庁に提出した。同年 10 月 31 日付で下村博文文部科学大臣により学部設置が認可された。この設置準備の経過の中で、いつも中心軸にあったのは「同志社女子大学らしい看護学教育とは何か」である。昨今の看護系学部の設置ラッシュを背景に、「今なぜ看護学部なのか」「特色ある看護学教育とは」など、いかに独自性を示していくかという問いに対する答えでもある。開設してから約 1 年が経過した今、その答えの具現化に向けて、日々学生達と向き合っていることを実感している。

「同志社看護」の創刊に際して、看護学部の未来をつくりあげる cornerstone として、改めて、看護学部教育のバック・ボーンとめざす教育について論じたい。

II. 看護学部教育のバック・ボーン

同志社には、約 130 年前、その創立者・新島襄が、日本で 2 番目に歴史のある看護婦（現・看護師）養成機関である同志社病院・京都看病婦学校を開始した足跡がある。この新島の医療・看護への志、そして具体的にどのような看護教育を実践していたのか、これらが同志社らしい看護学教育のバック・ボーンであると考えている。

1) 新島襄の医療・看護への志

新島は、1864（元治元）年から約 10 年間欧米で学んだ。帰国後、1875（明治 8）年に同志社英学校、翌年に同志社女学校を設立、学問の探求とともに、キリスト教主義に基づき、自治自立の精神を涵養し、国際感覚豊かな人物を育成することを教育の理念とした。また、1886（明治 19）年京都看病婦学校・同志社病院での医療・看護教育を開始した。開始当初は、仮の施設であった宣教師館で診療・看護教育がなされたが、翌年 1887（明治 20）年に、京都府から正式な許可を受けた。京都看病婦学校の設立目的は、「京都看病婦学校設立趣旨」に、「… 独り人ノ肉体ヲ看護スルノミナラズ又タ其靈魂ヲモ慰安シ之ヲシテ真ノ平康ト喜楽ヲ得シメント…」（上野他、1979, p.393）することのできる人物

1) 同志社女子大学看護学部 Faculty of Nursing, Doshisha Women's College of Liberal Arts

の養成と示している。また、新島は、1886（明治19）年9月の大日本私立衛生会京都支会での演説草案の中で、看病婦学校設立の目的を、第一に「病人ノ苦痛ヲ救フ…」、第二に「熟練ノ看病人ヲ養成スル…」、第三に「病人ノ心ヲ慰ムル事が甚大切…」の3つを挙げ、病人の気持ちに沿い、苦痛を和らげる看病法を学ぶこと、「…看病婦ノ熟練シタルモノハ、医者ノ薬法ヨリモ大切ナル事カアリマシヨウ、看病人一ツデ生カスモ殺スモ出来マスル…」（新島、1983, pp.111-113）と述べ、熟練した看護力と病人の心に寄り添える看護の重要性を示した。これは現代にも通じる看護職に求められる力、「看護実践能力」の育成をめざしていたのである。

さらに、新島は「…又病人ハ兎角神経ノ敏ナルモノナレハ、総テノ事ニ心ヲ用イネハナリマセズ、且如病人ヲ取扱ウニハ金銭の為ニモアラス名誉ノタメニモアラス又義務ノ為ニアラス、全其ノ病人ノ心ヲ思イやり真実ノ愛心ヲ以テ病人ノタメニスル人ガ入用デアル…」（新島、1983, p.113）と述べており、看護専門職としてのあるべき姿を示した。

当時、まだ近代看護が日本にほとんどなかった時代に、新島の現代にも通じる看護の考え方をどのように培っていったのだろうか。その背景を推察すると、まず、彼のキリスト教的な隣人愛は、医療の分野で必ず発揮されるという考え、また当時の日本にはあまり導入されていなかった欧米での近代医療・看護事情をすでに直接触れていたことなどが考えられる。実際1872（明治5）年、彼は岩倉使節団の通訳として渡英した際に、近代看護教育を開始したF. ナイチンゲールの看護についても見聞きしていたと思われる。それ以上に、自身の幼少期からの度重なる病人体験などから医学校・病院・看護学校設立構想が培われ、こんな医療・看護を受けたい、そのためにどんな医療人教育すればよいのかという具体的なイメージが膨らんでいたのではないだろうか。新島の闘病体験については多くの研究があるが、46才の時に虫垂炎の腹膜炎により死去するまで、彼自身が「自分は病気の問屋」（本井、2015, p.9）と述べ、彼の人生は病気と共にあったようである。中でも、27才頃リウマチ熱に罹患、以後何度も発熱に悩まされ、あわせて心臓弁膜症に伴う心不全を併発したため、彼の生活そのものが大きく制限されたようである（布施田、2014）。病気の際には、いわゆる名医から、当時の先進的な治療を受けたようであるが、この時の療養体験の中で、病人の目線から理想の看護婦像を構築したのではと考えられる。

2) F. ナイチンゲールによる看護教育の導入

新島の医療・看護への志を具現化するために、近代医療の先進国であったアメリカから宣教医J.C. ベリー、宣教看護婦L. リチャーズ達を病院・学校設立ブレインとして迎えた。L. リチャーズはアメリカ最初に訓練を受けた看護婦であり、近代看護を開始したF. ナイチンゲールに直接指導を受けた後、実際にボストン市立病院看護学校での教育を実践し、実績を積んだ後に来日した。そのため、京都看病婦学校は、F. ナイチンゲールの考え方や彼女自身が経験してきたボストンでの看護教育を範とした、当時としては世界的にも最新の看護実践や教育を日本に導入していたことがうかがわれた（岡山、2011）。例えば、生徒の規律に「生徒はまじめ、正直、誠実、信頼に足る、時間を守る、落ち着いて従順、清潔できちんとしている、忍耐強く明るく親切でなければならない」（京都看病婦学校規則、1887年）と示しているが、それとほぼ同様の内容がボストン市立病院看護学校規則（1878年）（M. リドル、1928）や救貧病院における看護（聖トマス病院での訓練、1867年；F. ナイチンゲール、1974）にも示されている。また、当時京都看病婦学校で学んだ学生による授業筆記ノートからも垣間見ることができる。「…空気ノ事、病室ハ大キク二階ノ室清潔ノ空気アル処カ宜シ病人一月半位カカル病氣ナル故ニ其室内ノ不用ノモノハ采皆取り去リストーフヲ置キ寝台ハ室ノ中央ニ於キ…其清潔ニスル為ニハ必窓ランマヲ開キオクベシ尤モ昼夜モナリ病人ノ口ヨリ悪性ノ呼気出ス故ニ此ノ如クシテ何モ清潔ノ空気ト交換スベシ…」（遠藤、1976, p.46）。これは院長ベリーによる「内科・小児科看護法」講義録の一部である。「換気」を重視したF. ナイチンゲールの看護に通じる。また、京都看病婦学校卒業生の多くに、日本や海外で幅広く活躍した足跡をみることができる。それらは、L. リチャーズ達による看護教育とその実践が、当時の日本だけでなく世界的にもレベルの高い、先進的で国際感覚豊かなものであったことを示している（岡山、2011）。

京都看病婦学校は、新島亡き後、同志社の手を離れ、医師佐伯理一郎にその運営は委ねられた。第二次世界大戦後、看護教育の新しい制度に切り替わるまで続いた。佐伯の看護職育成への志は、米寿記念の碑に刻まれている「受くよりも与うるは福也」の聖句からも偲ばれるようにキリスト教精神に基づいていた。

看護学部は、このような新島や佐伯の看護職育成の深い志を引き継ぎ、そして当時導入された先進的な看護教育の原点を忘れることなく前に進んでいきたい。

Ⅲ. 看護学部のめざす教育

同志社女子大学では、「キリスト教主義」「国際主義」「リベラル・アーツ」を教育理念として、伝統を大切にしながら、良心を持って知識や能力を発揮し、社会の礎となって活躍する、自立した女性を育むことをめざしている。また、「同志社女子大学の学生に卒業までに身につけてもらいたい10の力(DWCLA10)」としてあげられている分析力、思考力、創造力、プレゼンテーション力、コミュニケーション力、リーダーシップ、思いやる力、変化対応力、自己管理力、自己実現力の職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な社会人基礎力の育成をすすめている。看護学部では、これらを基盤として、看護職育成のための教育課程を構築している。その大きな柱は「看護実践能力の育成」である。

1) 総合的なヒューマンケアに基づく看護実践能力の育成

本学の看護学部がスタートした2015年春には、全国の看護系学部・学科は240を越え、全大学の4分の1以上が同学部・学科を有する時代となった。これは1992年の「看護師等の人材確保の促進に関する法律」公布以降、約20年間の急激な出来事であり、この動きは当分続きそうな勢いでもある。この背景の大きな要因として、少子超高齢化、医学・医療の高度化、人々の価値観の変化等、社会の多様な変化により、高度な専門性を備えた看護職が社会から求められていることがあげられる。この社会的要請に対応するために、数年来、厚生労働省では看護教育制度や看護基礎教育の内容・方法の検討が進められてきた。あわせて、文部科学省や看護系大学協議会を中心とした関係者による検討会が重ねられ、学士課程における看護基礎教育の在り方について、一定の方向性が提示された。すなわち、「看護基礎教育における看護実践能力育成の充実」である。

「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会報告書」(文部科学省, 2011)において、看護学士課程では「長い職業生活においてあらゆる場、あらゆる利用者のニーズに対応できる応用力のある国際性豊かな看護系人材の養成を目指すこと」を基本的な姿勢とし、コアとなる「看護実践能力と卒業時到達目標」を改めて提言した。これは、学士課程修了時に看護専門職者として修得すべきコアとなる5つの能力(ヒューマンケアの基本に関する実践能力、根拠に基づき看護を計画的に実践する能力、特定の健康課題に対応する実践能力、ケア環境とチーム体制整備に関する実践能力、専門職者として

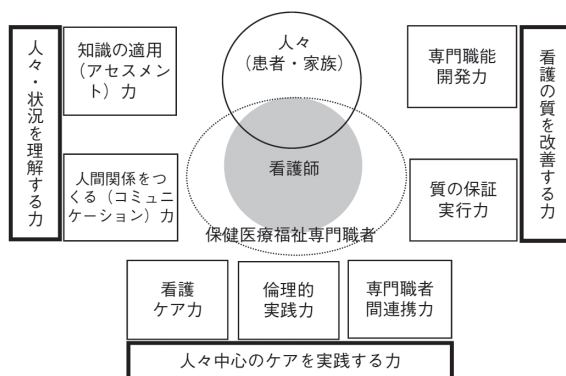


図1 看護実践能力の構造 (松谷ら, 2010, p.21)

研鑽し続ける基本能力)と20の看護実践能力とそのために必要な教育内容を示すものである。看護実践能力については、他にもいくつかの概念が紹介されているが、その中で、松谷ら(2010)は、30件の英文献の検討から、看護実践能力とは、「知識や技術を特定の状況や背景の中に統合し、倫理的で効果的な看護を行うための主要な能力を含む特質であり、複雑な活動で構成される全体的統合的概念である」と定義づけ、潜在的能力コンピテンスを前提とした基準を満たす行為コンピテンシーと説明している。さらに、看護実践能力を7要素に分類し、大きく3つの主要能力構造として図式化している(図1)。それは、①人々を理解する力(知識の適用力、人間関係をつくる力)、②人々中心のケアを実践する力(看護ケア力、倫理的実践力、専門職者間連携力)、③看護の質を改善する力(専門職能開発力および質の保証実行力)である。

看護学部では、この検討会や松谷らによる看護実践能力の考え方を取り込み、看護学に関する高度な知識と技術に加え、幅広い教養や人間の尊厳に基づく高い倫理観を学び、総合的なヒューマンケアに基づく看護実践力育成をめざしている。

2) 系統的で段階的なカリキュラムの構築

看護学部の教育課程は、同志社女子大学の理念のもと、「学士力と看護実践能力の育成」をめざしている。そして、大きく「全学共通科目」と「学科科目」から構成し、系統的で段階的な履修ができるように工夫している。

「全学共通科目」は、大学の教育理念に関わる「共通学芸科目」「キリスト教・同志社科目」「外国語科目」「スポーツ・健康科目」の構成となっている。ここでの学びを通して、総合的・学際的知識や幅広い教養の修得をはかり、自らの専門知識を得るだけでなく、様々な角度からの考え方を学ぶことで、総合的な理解力を養う。主に1年次で学修する。

「学科科目」では、看護学の隣接科目である医学や社会保障に関わる「専門基礎科目」、看護学関連の「専門科目」から構成されており、前者は「人体の構造と機能科目」「健康支援と社会保障科目」、後者は「看護基礎科目」「看護展開科目」「看護探究科目」と系統的な科目構成となっている。これらの科目を4年間で、段階的で丁寧な積み重ねによって学修する。すなわち、1年次では看護学の基礎となる「専門基礎科目」や「専門科目」の「看護基盤科目」、2・3年次はそれらに加えて健康状況に対応した看護方法を専門領域別に具体的に学修する「看護展開科目」、4年次には看護学をより深く学ぶ「看護探究科目」を履修する。看護学の基礎的知識や看護方法などは講義や演習、臨地実習では看護の実際を学修する。臨地実習は1・2年次に基礎看護学実習、3年次には各専門領域の看護学実習、4年次は学生が希望する専門領域での看護実践総合実習を行う。

なお、学科科目は看護師、保健師(選択制)の国家試験受験資格を得るために必要な科目、また養護教諭第一種免許の資格取得(選択制)に必要な科目を含んでいる。

3) 看護実践能力を育む看護実践総合演習

看護学部では、看護学の専門的な知識・技術・態度を段階的に積み上げる形で学び、総合的なヒューマンケアに基づく看護実践能力が修得できるように工夫している。中でも、1～4年次まで一貫して実施する「看護実践総合演習」は、既習の学習内容を統合して「知る」「わかる」から「実践できる」看護力の育成を目指している。その主なねらいは、①看護職としての基本的な姿勢の形成、②臨床判断能力とそれに基づく看護実践能力の修得、③キャリアを主体的に構築する力の修得であり、それらを有機的に結びつけながら段階的に進める。看護学部の全教員が専門領域を越えての担当者となり、学生個々の学習進度を確認しつつ、しっかりと修得できるようにサポートしている。

①看護職としての基本的な姿勢の形成、②臨床判断能力とそれに基づく看護実践能力の修得については、シミュレーション学習や看護OSCE(客観的臨床能力試験)において、既習の知識、技術、態度の統合による修得をめざしている。シミュレーション学習は、臨床の現場で起きる様々な出来事という素材をシナリオという教材に変えて学ぶものである(阿部, 2009)。シナリオとなる素材は、臨床にお

いて日常展開される患者とのコミュニケーションや生活援助、観察などあらゆる状況が対象となる。多様な状況をシナリオにできることから、学生が臨地実習で遭遇することの多い場面に加え、臨地実習では経験が難しい状況も取りあげることができる。シナリオに基づき臨床現場を疑似体験することにより実践力を身につけて、臨地実習に臨み、実際の現場や対象者さんからでないことへの気づきによるスキルアップを目指している。これらの学習成果は看護 OSCE で確認する。OSCE は限られた時間内に、模擬患者さんを対象に看護の提供を行う。シミュレーション学習と同様に臨床現場の模擬体験であるが、評価者（教員や臨床看護師）による評価といった能力試験の要素も加味されるため、学生は緊張度の高い中での看護実践能力の発揮を求められる。そして、学生は、体験に基づいた気づきに加え、模擬患者さんや評価者からのフィードバックにより、自らの強みと弱みなどの学習状況を把握し、自己の学習課題を明らかにする。学習課題は、看護技術 e-learning やプラティカルサポートセンター（スキルス・ラボ）などの学習環境を活用してワンステップずつ実践力を身につけることにより達成していく。

看護学部で、これらシミュレーション学習や看護 OSCE に、特に力を注いでいる理由は 2 つある。1 つは、現行の看護基礎教育課程では、講義や演習での学びを統合して実践する場が、臨地実習だけでは必ずしも十分ではなくなっていることが挙げられる。すなわち、臨地実習において、学生は、看護職者が行う実践の中に身を置き、看護職者の立場でケアを行う。看護実践に不可欠な援助的人間関係形成能力や専門職者としての役割や責務を果たす能力は、看護サービスを受ける対象者と相対し、緊張しながら看護行為を行う過程で育まれていくものである。しかしながら、臨床現場は、患者さんにとっては療養生活の場であり、学習者である学生のために時間をかけるなどの学習環境は常に保障されるわけではない。それを補う意味でも、シミュレーション学習を積極的に取り入れ、模擬患者やモデルを用いることで学習者を中心とした教育の展開ができる。学生は、失敗を恐れることなく、時間をかけて繰り返しトレーニングもできる。このような安全で安心な学習環境では、学生も主体的に知識を補い、専門的な技術を向上させることができると考えている。

もう 1 つの理由は、現行の学士課程での教育上の大きな課題は、大学と臨床現場との乖離があり、それを埋めるための努力が必要ということである（眞鍋，2011，p.794）。臨地実習において、学生はひとりの患者さんを受け持ち、実際の看護を展開するが、複数の患者さんを同時に受け持つ機会はほとんどない。しかし実際には、就職後すぐに複数の患者さんの受け持ちを求められる。新人看護師は、複数の行為や人との関わりの中での優先度を考えながら行動するといった多重の課題や時間が切迫した状況のもとでの適確な優先順位と迅速な対応が難しい段階である。さらに、臨地実習では身体的侵襲を伴う採血などの処置は、学生であるために制約される現状にあることから、シミュレーションや OSCE では、臨地実習で十分に経験ができない状況や技術についても、現場のリアリティのあるシナリオを作成することにより学修することができると考えている。

このように、看護実践総合演習は、認知領域、情意領域、精神運動領域の能力を総合的に学修できることだけでなく、現在の看護基礎教育の大きな課題である看護実践能力育成や大学と臨床現場との乖離を埋めることのできる有用なプログラムであると考えている。

4) キャリアを主体的に構築する力の育成

本学看護学部では、学生全員が看護師の指定規則に対応した教育課程を学修する。また、一部の学生は保健師の指定規則や養護教諭一種の教職課程に対応した教育課程を学修し、卒業後は看護師、保健師、養護教諭として就職あるいは大学院や助産師養成機関に進学する。保健師や養護教諭の就職状況はやや厳しいものの看護師の有効求人倍率は約 2.5 ～ 3.0 倍という高い数字で推移している。すなわち、看護師での就職を希望する学生にとっては、就職先を探す苦労や不安は少ない。また、大学で学んだ専門性が就職に直接結びつくことや在学中の臨地実習では、実際の医療現場で実践的な学修をするので、学生時代から卒業後の像が描きやすいという特徴もある。

一方、これまでの看護学生の就職相談の経験から、看護職に就くことには揺らぎがなくても、具体的な目的や目標を抱いているのではなく、何となく就職先を選んでいる学生も多いことを感じていた。ま

た、卒業直前の看護系大学生を対象に「看護職キャリアの可能性」のテーマでキャリアデザインに関する特別講義を試みたところ、参加者は少なく、参加学生からは「キャリアと聞いて私には程遠いと感じていた」と感想もあった。このような状況から看護学生は、就職に対する不安が少ない反面、自分自身のキャリア開発や将来ビジョンを深く考える機会を逸していることを実感した。これらの経験から、低年次からキャリア教育・学習として正課内の科目と正課外の活動を位置づけて体系化することの必要性を痛感している。

看護学部では、主体的なキャリアの構築をねらいとして、看護実践総合演習の科目内で入学時から学年の進行に合わせた段階的な教育を計画している。看護職には様々な職種や活動の場があるとともに、各個人の能力および生活（ライフサイクル）に応じてキャリアをデザインし、自己の責任でその目標達成に必要な能力の向上に取り組むことが求められることの必要性に気づき、その素地を身につけていけるように内容を工夫している。具体的には、キャリアカウンセラーによる講義や先輩看護職による看護の魅力に関する講演を取り入れ、学生の個人ワークやグループワークによる年間目標の設定とポートフォリオの作成を行っている。さらに、4年間の継続した担任教員（アドバイザー）の個人面談の際にもポートフォリオをひとつの資料として、学生の成長を確認している。これらのキャリアの主体的な構築への取り組みは、看護実践能力のなかの専門職者として研鑽し続ける基本能力や専門職開発力の修得に大きく寄与すると考えている。看護専門職が社会情勢の変化に応じて社会から期待される役割を果たし対応するためにも、学生自身が、在学中に将来の方向性に関心を寄せて、自らの力で学び続ける素地を身につけることを期待している。

5) 主体的な学修力を育む PSC の設置と ICT 活用

看護学の講義・演習・臨地実習での学びに加え、学生がいつでも自由に看護学の知識や技術の基本をくり返し学習できるような学習環境を整備している。ハード面では、プラクティカルサポートセンター（PSC）を設置し、各種看護教育用シミュレータ・トレーニングモデルや医療機器、備品などを整備しており、医療現場を模した環境で安全かつ効果的に繰り返しのトレーニングができる。また PSC には専任のインストラクターが常在しており、学生のトレーニング中のサポートやきめ細やかな学習ニーズへの対応を行っている。また、PSC は、薬学部との連携で、チーム医療を学ぶ場としての活用も計画している。

学生には iPad を貸与し、デジタル書籍や教材の活用をすすめている。オンラインツールとしては、看護技術 e-learning、国家試験の学習支援 e-learning や疾患の診断・治療方針、治療薬情報、診断アルゴリズム、検査・処方例、ガイドラインなどの最新の情報が確認できるツールを提供し、いつでもどこでも学習できる環境を整備している。

IV. おわりに

ある日の看護学関連の授業で、F. ナイチンゲールの著「看護覚え書き」（2014）を用いての講義がなされていた。この著は 1859 年に出版されたもので、看護のバイブルのように、現在でも全世界の看護職者をはじめ保健医療関係者に広く読まれている。130 年前、京都看病婦学校においても、この著と同様な内容が教授され、実践されていた足跡がある。その両者のつながりを思うとき、「同志社看護の夢、今ふたたび、そしてさらに大きく」進もうとしていることを感ぜずにはいられない。そのためにも、看護学部では、新島の看護職育成の深い志や当時の先進的な看護教育の原点を忘れることなく、総合的なヒューマンケアに基づく看護実践能力のある看護専門職の育成をめざして、教職員のみならず学生達と共にしっかりと歩んでいきたい。

文 献

- 阿部幸恵 (2009) : シミュレーション教育を支える教育観とプログラム作成の一連. 看護管理. 19 (11) : 924-925.
- 遠藤恵美子 (1976) : 岡本おいねさんの筆記ノート (病人の看護). 看護の科学. 3 : 44-50.
- F. ナイチンゲール著 (1867). 湯槇ます監修 (1974) : ナイチンゲール著作集第2巻所収, 救貧病院における看護, 付録3「ナイチンゲール基金」による見習い生の職務. 46. 東京 : 現代社.
- F. ナイチンゲール著 (1859) / 小玉香津子・尾田洋子訳 (2014) : 看護覚え書き. 本当の看護とそうでない看護. 東京 : 日本看護協会出版会.
- 布施田哲也 (2014) : 新島襄の持病リウマチズム (Rheumatism) について. 新島研究. 105 : 114-126.
- 眞鍋えみ子, 倉ヶ市絵美佳, 橋元春美, 他 (2015) : 特集「看護実践能力向上のためのストラテジー」教育と臨床の協働による看護実践能力向上への取り組み-循環型教育システムによる看護師育成プランの紹介-. 京都府立医科大学雑誌. 120 (10) : 793-800.
- 松谷美和子, 三浦友理子, 平林優子, 他 (2010) : 看護実践能力 : 概念, 構造, および評価. 聖路加看護学会誌. 14 (2) : 18-28.
- M.Riddle. (1928) : Boston City Hospital Training School for Nurses, Historical Sketch 1878-1928. 11-16. Boston : Boston City Hospital Nurses' Alumnae Association.
- 文部科学省高等教育局医学教育課看護教育係 (2011) : 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, 最終報告.
- 本井康博, 岡山寧子, 石川立 (2015) : 同志社医学教育の歩み-同志社病院と京都看病婦学校-, 同志社時報. 139 : 8-23.
- 新島襄著. 全集編集委員会編(1983):資料番号 26 看病婦学校設立の目的. 新島襄全集 I. 110-114. 京都. 同朋社.
- 上野直蔵編纂(1979):資料番号 123 京都看病婦学校設立趣旨. 同志社百年史(資料編 1). 393-376. 京都. 同志社.